


メル・ギブソン主演の映画『パトリオット』を久しぶりに見た。戦争は人間を野獣以下の異常な残虐行為に走らせる。効率の良い兵法や武器による兵士の殺し合いさえもおぞましいのに、非戦闘員である婦女子、市民をも無差別に虐殺する。石やナイフで殺されるのも苦痛だが、無人機に木端微塵にされ、水素爆弾に塵のように消滅させられるのは、あまりに無神論的であり、唯物論的である。機械に殺されるのはあまりにおぞましく、とても嫌だ。人間の歴史に戦争は不可避だと信じている人は多いし、これまでの歴史は戦争を中心に語られることが多かった。しかし、これからは改めて自律する個人として、身近な地域社会（くに）の歴史を発掘することから、戦争を回避する先真文明時代のあり方を探り、非暴力、不殺生の真文明に向けた一層の文化的共生進化を勧めるべきだ。これから非暴力、不殺生の市民自治の政治によって、「自由、平等、友愛」を保証する、素のままの美しい暮らしができる真文明の創り方を探り、これを迎える用意をしておきたいものだ。

アレクシエーヴィチ(1985)の『ボタン穴からみた戦争—白ロシアの子供たちの証言』に記述されている多くの子供たちの戦争体験、不条理な惨苦に会いながら、辛うじて生き延びた個人の歴史証言は当時の実生活を中心に語られている。この記録なくして、人間の歴史は統合されえない。彼女は言う、「過去を忘れてしまう人は悪を生みます、そして悪意以外の何者も生み出しません。…地上で一番すばらしい人たちは子供たちです。不安に満ちた二十世紀に子供たちをどう守ってやったらいいのでしょうか？その心や命をどう守ってやったらいいのでしょうか？その子供たちばかりでなく、私たちの過去や未来を？…人々の住むこの惑星をどうやって守ったらいいのでしょうか？…子ども時代を二度と再び「戦争中」と呼ばないために」と。

人間として生きた神仏

ジーザス・クライストやゴータマ・シッダルタ、物語のラーマ神王（ヴィシュヌ神の化身）も、皆、ともに神仏でありながら、人間としての苦難の人生を勇敢に送り、個人として生死の後、復活ないし転生した。内村鑑三（1946）が言うように、「思想のこの世の中に実行されたものが事業」が、すなわち個人の人生における自由を達成する努力の結果としての、「後世への最大遺物」とするのなら、解脱とはこのことかとも思った。絶望の末世を人間として精一杯生死し、それでも、再び廻り来る真文明の時代に希望の光を見いだすことが解脱なのだろうか。悟りと解脱は異なった事象であり、悟りは生きているうちにあるかもしれないが、解脱は死に際するまでないのだろうか。

解脱とは、「束縛から離脱して自由になること。現世の苦悩から解放されて絶対自由の境地に達すること。また、到達されるべき究極の境地、涅槃」とある（広辞苑）。それでは、自由とは何か、「一般的には、責任をもって何かをすることに障害（束縛・強制

など)がないこと。自由は一定の前提条件の上で成立しているから、無条件的な絶対の自由は人間にはない。自由は、障害となる条件の除去・緩和によって拡大するから目的のために自然的・社会的条件を変革することは自由の増大である。この意味での自由は、自然・社会の法則の認識を通じて実現される。…ア社会的自由。…イ意志の自由。…ウ倫理的自由」(広辞苑)。この語義を重ねてみると、絶対自由が人間にないのなら、解脱は死の際までないということになる。広辞苑では、「ウ倫理的自由」に関してさらに説明し、「カントにおいては、意志が感性的欲望に束縛されず、理性的な道德命令に服することで、自律と同義。サルトルにおいては、人間は存在構造上自由であり、したがって常に未来の選択へと強いられており、それ故自由は重荷となる」と追記している。

私は元国家公務員・国立大学教授として、俗世間で遠慮した日々を過ごした後、今は無職になって、大方の義務をなくし、個人の責任に基づく自由が増した。フロム(1941)は『自由からの逃走』の序文において、「すなわち近代人は、個人に安定をあたえると同時にかれを束縛していた前個人的社会の絆からは自由になったが、個人的自我の実現、すなわち個人の知的な、感情的な、また感覚的な諸能力の表現という積極的な意味における自由は、まだ獲得していないということである。自由は近代人に独立と合理性とをあたえたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独はたえがたいものである。かれは自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めか、あるいは人間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる。…なぜなら、全体主義がなぜ自由から逃避しようとするのかを理解することが、全体主義的な力を征服しようとするすべての行為の前提であるから」と述べている。

フロムの分析からすれば、近代人は自由から逃走し、解脱を希求し、努力しようとしていないようだ。これが全体主義の拡大を後押しし、フロムは第二次世界大戦下、ナチズムのドイツを追われた。ヒトの文化的進化は、少なくとも、ある状況での相対自由は求めてきた。フランス革命のめざした自由・平等・友愛には文化的進化として歴史的な意味がある。自由と平等は個人主義を支え、平等と友愛はトランス・パーソナルに向かう。この先に何をいかに創造するかが、一層の文化的、共生的進化なのであろう。

外面の物質・技術の便利さから内面の精神の自由、心の豊饒さに向かう変化の意思が解脱への入り口なのだろうか。囚われない絶対自由が解脱か。しかし、家族・友人らに囚われるのも、やはり自由なのだろう。囚われないのが絶対自由なら、やはり解脱は死に際して後にしかないのかもしれない。すべて無に帰す死には、何もない暗黒、家族のことも、自分の意思もないのだろう。だから、そこに至るまでに、最大遺物を整理しておく。

科学者、技術者や医者が神の手、スポーツ選手や職人が神業などと讃えられ、企業人、官僚や政治家が昇り詰めたと賞賛され、このように人間が増長しているこの時代は、『もののけ姫』(宮崎駿 1997)に出てくるアシタカが言う「カミ殺し」の時だ。神々さえも

人間（応現神）として死生したのに、人間が現人神を名乗ることはありえないことだ。個人や集団の技能や技術を褒め称えることはとても良いことだが、「神」のみ名を冠する「神業、神の手」などというのは末世の驕り高ぶった思い上がりで、信仰心の喪失だ。

シューマツハ・カレッジのJ. ドーソンの講義でのプログラム。相対する他者にひたすら語り、聞いてもらう。他者は聞くだけ、その後、話し手と聞き手が交代し、同じようにする。これはまさにトランス・パーソナルな統合する学習手法だ。これには4段階あり、2~3分ほどで一方向的に語り、話題が展開できなければ沈黙する。私は、知人もおらず、高みの見物を決め込んでいたが、親切な方がパートナーを申し出てくださいました。そこで、次のようなことを聞いていただいた。

1) 課題について：今、「来るべき文明」について考えている。2) 負荷を負い、難渋している者の視点から：世界に飢えた人々が沢山いるのに、日本人は食べ物を粗末にして、大量の生ゴミを出している。3) 他の生き物種の立場から：食べられる側にある植物は、人間と栽培する契約を結んで、共進化したのに、人間は生命を尊重していない。在来品種を一方向的に捨て去り、GMO植物を作って隷属化している。生命を奪っておきながら、美味しく料理して食べないで、ごみにしている。4) これから生まれる赤子の立場から：生命を大事にしないのは精神が崩壊していることだ。子どもの未来に希望があることを示しておくべきだ。

世界の周期

1) 4つの時代ユグ yuga

歴史の終焉、終末をどう超えていくのか。末法思想、仏教もヒンドゥ教も、現世は悪がみちて、滅亡に向かうと言っている。キリスト教も最後の審判に備えよとしている。ユグ第4時代における、人間の自堕落への警鐘だと思う。しかし、警鐘や警告を超えた信じるべき予言だとしたら、第四期の後には再び第一期が来るのであろう。廻り来る真文明時代、ラーマヤン（ラーマヤナ）に描かれているような、来る新たな第一期に備えて、人間は何を準備したらよいのだろうか。

4つの時代ユグとは、ラーマヤンから摘要すると、次のように述べてある。「カラス仙人ブシュンディは、正法がすたれて悪法がはびこる末世の諸相を、なおも熱っぽく説きつづける。・師は弟子から財貨を奪い取ることにしか考えません。弟子の悩みにはけっして応えてやろうとはしません。心が貪欲に縛りつけられ、魂が常に地獄の底を這いずり回っているからです。両親が子どもたちに教えることと言ったら、どうすればたらふく食べられるかという、目先のことばかりです。…末世に幅をきかせるのは、金品の力です。・人倫道徳を標榜するものは枚挙にいとまがなくても、真の人格者は絶無です。末世には、天災、地変、飢饉が再々訪れます。穀物がとれず、多くの人々が悲しみのうちに飢えて死にます。・得体のしれない疾患が、多くの人々を苦しめます。安寧幸福などという社会は、どこを探しても見あたりません。…心に、自足、平安、理性を

保つものは皆無です。賤種貴種を問わず、誰もが平気で物乞いをします。嫉妬、憎悪、罵詈、強欲、不正がわがもの顔にはびこります。平等観は枯渇し、差別と別離と孤独の悲しみで、人々は死に瀕します。…末世には悪事が充満しますが、一つだけ偉大な功德があります。末世に生を受けた者は、労することなく生死の苦縛から解放されることです。真理の時代サツチャユグ、神々の時代ツレタユグ、形式模倣の時代ドアパルユグにおいては、祭祀、祈禱、苦行の積み重ねで辛うじて得られる解脱位が、末世カリユグにはただ神のみ名を唱えるだけで安易に得られるのです」。

「宇宙の第一期であるサツチャユグに生きる者は、一人残らず聖者、悟者であります。主神ハリ様〔注：ヴィシュヌ神〕を念じながら、一切生類は洩れなく生死の苦海を渡って彼岸に到ります。第二期のツレタユグに住む人々は、一心に行学に励み、いっさいの煩悩を主神に全てを託しながら生死の苦海を渡してもらいます。第三期のドアパルユグに生きる人々は、ラーム様のみ足を一心に礼拝しつつ、苦海を乗り越えるのです。そのほかには、いかなる行法もありません。さて、宇宙の第四期末世カリユグについて説明します。この時代には、ただ単に主神ハリ様のご功業の物語を歌い讃えるだけで、生きとし生けるものはみな楽々と、苦海を渡ることができるのです。…末世には梵行、祈禱、悟道は絶え果てます。…純粋な信仰心があれば、末世にまさる恵み豊かな、祝福された時代はないのです」。

「汚れない純質、平等観、大覚悟道、無情の法悦があまねく満ちわたるとき、これが宇宙の第一期、真理の時代サツチャユグの特徴とお心得ください。…全体として生類が日常の営為を大切に、慎み深く平和に暮らすのが、第二期ツレタユグの特徴です。…大衆の心に喜悦と恐怖が交錯するのが、第三期ドアパルユグの特徴です。…四方八方、敵意、害念、怨嗟に包まれ、だれもが恐怖と苦痛にさいなまれて片時も心休まるときがないのが、末世カリユグの際立つ特徴です」。

『ラーマヤン』を翻訳した池田運（2002）は序で次のように語っている。「〔注：この古典文学書〕が、どうしてわが国ではあまり顧みられないのか、それが不思議でなりません。その理由を考えると江戸時代の鎖国、明治初期にはじまった廃仏毀釈、文明開化に伴う欧米文化の偏重とアジア蔑視の風潮などが、まず頭に浮かびます。…ラーム王生誕は、悪魔を含むすべての生類に解脱を与えて、大宇宙の根本原理ブランムと合一させることを終局の目的とします。…ラーム王は、ラームラッジャという理想の王国を建設して、殺生、差別、疾病、悲愁、苦悩などのない至福の樂園を地上に現出させ、劫が尽きたあと眷属一同をひきつれて神の国へと還ります。まさしく万民融和、五穀豊穰、息災延命、極楽往生をもたらす、日本人好みのめでたい福の神と言えます。ガンジーが目指した理想の国も、このラームラッジャにほかならなかったのです」。

こうしてみると、末世カリユグはとてつらい時代だからこそ、純粋な信仰心さえあれば、修行をしなくても解脱できるようである。こうは言われても、過剰に大欲を煽られ、拝金、名利に取りつかれ、物品に囲まれて便利に暮らす、現世の孤独地獄の中では、

純粹な信仰心に到ることは、とても容易なことではない。ひたすら、「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華經」あるいはラーム神王を崇めることで、解脱できると説かれれば、安心できるのかもしれない。

2) 末法思想

末法思想とは、釈迦が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる正法の時代（お釈迦様がこの世におられた後千年）が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない像法の時代（さらに千年）が来て、さらにその後、人も世も最悪となり正法がまったく行われぬ末法の時代（その後の一万年）が来るとする歴史の見方を言うようだ。

上述の末世カリユグに相当すると考えられる。正法がやがて衰えるとの考え方は修行者への訓戒であったと説かれているようだが、戦乱や自然災害など、現実の悲惨さが目を覆うほどになると、「末世」観は逃れがたく、インドや中国では末法思想に強くとりわれる人々もあった。同様に、日本における末法の時代の始まりは、武士が台頭し、戦乱が続くようになった11世紀頃で、民衆の不安も高まり、鎌倉仏教が信仰の新境地を開いていった。

中でも、浄土真宗の開祖、親鸞は個人の心境として、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」とおっしゃっている（歎異抄）。彼の教えでは、御仏様が救済したいのは、煩惱具足の衆生（凡夫、悪人）であり、他力の信心をえない疑心自力の作善の人（善人）ではない。聖教の学問は内に向けられるべきものであって、外に誇るべきものではない。そして、その内に向かって知られた喜びは、また他に伝えられるべきであろう、と述べておられて、とても共感する。私は40年間、大学に勤めて、知識と経験の伝達に誠実に努めたが、学生の皆さんに教えることなど、意思の上でも、能力的にもとても及ばなかった。本来、教え、教えられる関係ではなく、学びたい人が自ら学ぶ（自力）ことにささやかな共学、共助することが、私の役割だと思った。

とても共鳴する言葉は、「親鸞は弟子一人も持たずにさふらふ。…弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり」。確かに、信仰も学問も、個人の思惟であり、生き方であり、弟子はいるはずがない。弟子からすると、道を外れないために、良い師は必要であるが、道を学ぶ者には弟子はいない。一人一人が、内発的に意思を深め、信仰にたどり着くものなのだろう。深く自省して、凡人（悪人）であることを知ることで、本質的に、信仰は個人の内に深く広がる。このことはトルストイの思索に合致していると理解した。煩惱具足の凡人が世の中を良くしたいと作善（自力）に勤しみ、末期の際になって、自力が及ばず、他力（自然あるいは神仏）に依るまで、解脱はないと思いついた。私は信仰も個人主義的に存立し、ひとえに私の生死（人生）における解脱のためであると考えてみた。

3) 最後の審判

現代社会が複雑さを増し、価値観や信念が激しくブラウン運動をしている、このカリユグの末世の時代に、歴史には終わりがあるという終末論を超え、複雑性を受容する多様性豊かな真文明の時代への希望を探したい。

恐らくキリスト（人であった神）の意に反して、権力者はキリストを磔刑にし、キリスト教の名のもとに、多くの衆生（とりわけ異教徒）の命を失政と戦争で奪ってきたし、今も奪っている。2000年余り続いてきた、この歴史の終末期に、個人と人間（*Homo sapiens*）はどのような「最後の審判」を受けるのだろうか。幼稚園の1年間をマリア様のもとで過ごしたのみの私はキリスト教徒ではなく、神の怒りと救済に関する諸教派の論議を統合的に理解することは到底ながら不可能である。

不十分な理解を承知であえて論を進めよう。「最後の審判」については各宗教において詳細には緒論あるが、おおよそ、最後の審判の日には天変地異（ハルマゲドン）が起こり、人間は神、鬼神に裁かれ、悪人はすべて滅び、善人は救われる終末を啓示しているようである。このような歴史には終わりがあるという終末論は、天災や人災で社会が著しく不安定な時代に、神仏や来世に救済を求める考え方である。「最後の審判」、「末法思想」、「カリユグ」などはその考えに沿ったものであるが、反対に、キリスト教でも仏教でも、キリストの磔刑によってすでに人間は贖罪されたとか、末法の世においてこそ救いがあるとの異論がある。

それでは、来世とはどのような時空なのであろうか。仏教宗派により異なるが、天道界や地獄界に転生するとの解釈もあれば、浄土や六道に行く、あるいは現世こそが浄土で、今を活かせとの教えもある。単に死後の世界との意もある。キリスト教での天国と地獄、イスラーム教では信教を貫いた人間が永遠の生を得る天国に行く。このような信仰は科学的な思考からは帰結しにくい、人間は信仰により行動規範を得ることができるとも考えられるので、個人の信仰には深い敬意をもちたい。

フクシマ（1992）は『歴史の終わり』の「世界史に下される最後の審判」と題した項において、「ヘーゲルに立ち返ることが重要なもう一つの理由は、ヘーゲルの歴史観が、人類の歴史発展は無限に続いていくのか、それともわれわれはもうすでに歴史の終点に達してしまったのかという問題を考えるための枠組みを与えてくれるからである。…現在の社会的・政治的組織の形態が人間の本質的な性情を矛盾のひとつかけらもないほど満足させているとすれば、歴史はすでに終わりを迎えていると論じても差し支えないのである。…歴史主義の立場に立つ哲学者は、リベラルな民主主義が最高かつ最終的存在であると認めるだろう。かくして世界史が最後の審判を下すことになる。…重要なのは世界史の全過程を通じて生き残ってきた、たった一つの体制ないしはシステムを認めることなのだ。そして、人間の欲望をいかにして満たすかという、人類誕生以来の問題を解決する能力があるかどうか、また、人類を取り巻く環境の変化に適応し存続していく能

力があるかどうかという点が、ここでの判断の基準となる」と記述している。

私は、歴史に終わりはなく、末世カリユグの後に、新たな第一時代サツェユグが再び廻り来るといった真文明への希望、人間の文化的な適応進化が続くとの立場をとりたい。循環する第一時代が真文明の時代とするのなら、この来世を迎えるために、現世の私たちは何を準備したらよいのだろうか。一つの糸口として、科学技術に過剰に依存、換言すれば隷従してまで求めた便利 convenience への欲望を適正に制御して、不便さを楽しむ豊かな暮らしが復元力 resilience を回復するように高めて、移行過程 transition を経て希望の端緒となるのだろうと考え始めている。

参考文献

- アレクシエーヴィッチ, S. 1985 (三浦みどり訳)、ボタン穴から見た戦争—白ロシアの子供たちの証言、群像社、横浜、pp. 302.
- フクシマ, F. 1992 (渡部昇一訳)、歴史の終わり (上)、三笠書房、東京、pp. 332.
- 長谷川明 1987、インド神話入門、新潮社、東京、pp. 120.
- 金子太栄 校注、1991、歎異抄、岩波書店、東京、pp. 94.
- 木俣美樹男 2014、『先真文明時代』への覚書、民族植物学ノオト7 : 29-37.
- 宮崎駿 1997、もののけ姫 (上・下)、徳間書店、東京。
- ツルシダース (池田運訳 2003)、ラーマヤン —ラーマ神王行伝の湖、講談社出版サービスセンター、東京、pp. 1021.
- 内村鑑三 1946、後世への最大遺物・デンマルク国の話、岩波書店、東京、pp. 142.

* 用語法を確認するために、ウキペディアで下記の項目を参照した。

終末論、来世、最後の審判、ヨハネの黙示録、末法思想、悪人正機、ハルマゲドン、天国。